

第2章-4. 仏教

1. 古代インド哲学

バラモン教……もともとは自然崇拝の宗教。聖典「ヴェーダ」

賛歌「リグ・ヴェーダ」、祭詞「ヤジュル・ヴェーダ」、呪詞「アタルヴァ・ヴェーダ」など

⇒次第に、祭祀を実行する聖職者を頂点とする身分制度が形成

→ カースト 制度……その4つの基本身分（ヴァルナ）

① バラモン（司祭者）、② クシャトリア（貴族）

③ ヴァイシャ（庶民）、④ シュードラ（奴隸）

⇒宗教としては形式化

しかしその内部には自然と人間の関係についての深い洞察がある。

//

◆ 「ウパニシャッド（奥義書）」の哲学＝インド哲学の源泉

・ 輪廻転生

因果応報・自業自得

あらゆる生物はその死後、カルマ（業）にふさわしい姿に生まれ変わり、生と死は無限に繰り返される→その不安により生は苦しみとなる。

・ 梵我一如

宇宙の本質（ブラフマン、梵）と、個々の生命（アートマン、我）が一体であること、を悟れば、解脱（苦しみから逃れること）できる。

※ ヒンドゥー教……現在のインドの宗教。バラモン教の影響が強く残る。

ブラフマー 神（創造）、ヴィシュヌ 神（維持）、シヴァ 神（破壊）

※ 六師外道 ろくしげどう……バラモン教を批判し形成された新たな教団を、仏教が批判して命名

ジャイナ 教（開祖ヴァルダマーナ、不殺生＝アヒンサーを徹底）も含む。

しかしヒンドゥー教などからは、仏教も異端の六派哲学の1つとして扱われる。

2. 仏教の成立

◎創始者 ガウタマ・シッダールタ（ゴータマ・シッダッタ）（463～383.BC）

現ネパールのシャカ族の王子→「釈迦牟尼（シャカ族の賢者）」

ブッダ（仏陀）＝“真理に目覚めた者、悟りを開いた者”の意味

衆生（一切衆生、生ある者全て）に対して ダルマ（法、真理）を説く
カースト制度批判・真理の前の平等

※ 「ダンマパダ（法句経）」「スッタニパータ」……彼の言葉を簡潔にまとめた初期の経典

「縁起」「四諦」「八正道」「慈悲」などは初期パーリ語経典に見られる。

これに対し「四法印」は大乗仏教によるアレンジ後の教えのようだ。

<縁起と四諦>

▶ 縁起 ……すべてのことは「縁があって起こる」
万物はたがいに依存しあい変化する → 単独で不変でいられない。



- ▶ 四法印 ……仏教の根本である4つの真理、という意味
 - ①. 諸行無常 ……全てのものは常に変化し、とどまることがない
 - ②. 諸法無我 ……何ひとつとして「不変の実体 (=我)」を持つものはない
 - ③. 一切皆苦 ……上記のことを悟らなければ、この世の全て苦しみとなる
 - ④. 涅槃寂静 ……悟れば、心安らかな境地にいたることができる



涅槃 (ニルヴァーナ)

あらゆる苦悩の原因…… 煩惱 (渴愛、=欲望) に惑わされて
真理に対して無知であること (= 無明)

※三毒……^{とん}貪 (むさぼり)、^{じん}瞋 (怒り)、^ち癡 (おろかしさ)

愚かな人間 (凡夫) は、ひとりよがりな考えにとらわれている (= 我執)
そのため、かえって苦の原因を積み重ねている。

四苦 ……生・老・病・死

八苦 ……四苦の他に

- 愛別離苦……愛するものと別れる苦しみ
- 怨憎会苦……憎いものとあわねばならぬ苦しみ
- 求不得苦……求めるものを得られない苦しみ
- 五蘊盛苦……物質 (色) と精神 (識) との間の作用 (受・想・行) が盛んである苦しみ

▶ 四諦

①. <u>苦諦</u> → →	②. <u>集諦</u>
人生は苦悩をまぬがれない	苦悩の原因は煩惱である



④. <u>道諦</u> ← ←	③. <u>滅諦</u>
そのためには <u>正しい生き方</u> が必要である	煩惱を滅し、迷いを離れば 苦悩がなくなる



▶ 八正道 (中道)

正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定
8つバラバラではなく、「8重に重なったひとつの正しい道」
快樂主義と苦行主義の両極端を否定

3. 仏教思想の展開と大乘仏教

◆原始仏教の教団

出家者 ……その集団＝サンガ（僧迦） ……家族から離れ修行を重ねる。
在家信者……仏陀、ダルマ、サンガの3つを敬いながら日常生活をおくる。
※三宝……聖徳太子「十七条憲法」

◆仏教の2つの理念

- 自利 ……世俗を離れ厳しい修行をし悟りを完成させる（その人＝阿羅漢）
これを重視する 上座部 →東南アジアなどに広まる（南伝仏教）
- 利他 ……世俗の生活の中で万人のために悟りに基づき 慈悲 を実践する
慈（マイトリー）＝いつくしみ。他者に楽しみを与えること。
悲（カルナー）＝あわれみ。他者の苦しみを取り除くこと。
これを重視する 大衆部 →その中から大乘仏教が BC.1c に発生
シルクロードをへて中国・朝鮮・日本へ（北伝仏教）
浄土教・密教は中国で、禪宗も中国で道教と出会って生まれた。

<大乘仏教>

◎ ナーガールジュナ（竜樹、150-250 頃）……大乘理論の完成者

- ▶ 「空」の思想……くもりのない知恵の目で事柄の真相を見抜くこと
「苦悩の実体」が存在しているかのように考えがちだが、
そうではなく「悩む心が悩みを育てているのだ」と悟るべきなのだ。

- 〔
・色即是空……「色（物質）」は、縁起により成立した不変の実体を持たない「空」
・空即是色……空は単なる空ではなく、様々な要因により「色」として現象する。
→この真理を説く初期の大乘仏教經典の総称「般若経」
その最大のものが「大般若波羅密多経」、最小のものが「般若心経」

- ▶ 菩薩 ……大乘の悟りを求める者（＝慈悲によって衆生を救済せんとする者）

六波羅蜜 の実践によって、“利他”と“自己の悟り”を完成させる。

布施（ふせ、他人への施し） 持戒（じがい、戒律の遵守）
忍辱（にんじく、耐え忍ぶ） 精進（しょうじん、修行に励む）
禪定（ぜんじょう、精神統一） 智慧（ちえ、真理を悟る、「般若」ともいう）

波羅蜜……パーラミター＝「向こう岸へ至る」の意味

◎ アサンガ（無著、310-390 頃、兄）、ヴァスバンドゥ（世親、320-400 頃、弟） 唯識 思想……すべての物事は、心（識）が生み出したものにすぎない

<東アジアの仏教>

中国で仏典漢訳……クマーラジーヴァ（鳩摩羅什）、玄奘。二人とも「三蔵法師」最初から漢文で書かれた経典も出現

浄土教……中国在来の信仰と融合して広まる

密教 ……インド僧である金剛智・不空から唐僧恵果をへて空海へ

禅宗 ……修行の1つ座禅が中国道家思想と出会って生まれた

<菩薩の種類>

・観音菩薩

観世音菩薩（鳩摩羅什の訳）、観自在菩薩（玄奘の訳）

衆生の声を聞き、どこにでも自在にその身を現して救済してくれる

・弥勒菩薩（マイトレーヤ）

菩薩行を終えて、現在は兜率天（とそつてん）に住んでいる。

仏陀入滅後、56億7千万年後にこの世に下ってきて仏となり衆生を救う。

・地藏菩薩……弥勒菩薩が出現するまでの間、現世を救う

・文殊菩薩……仏の智慧をあらわす（梵名マンジュシュリー）

・普賢菩薩……仏の慈悲をあらわす

<仏、仏陀、=如来>

・大日如来=毘盧遮那仏（びるしゃなぶつ）

マハーヴァイローチャナ（=大いなる光り輝く仏）

・阿弥陀仏（阿弥陀如来）

無量寿仏、無量光仏（無明の現世をあまねく照らす光の仏）

極楽浄土という仏国土を持ち、特に西方極楽浄土の教主でもある。

かつてインド王族の出身で、法蔵比丘という名の修行者・菩薩であった時、衆生救済の48の願い（四十八願）を立て、それが達せられないうちは自分も成仏しない、と誓って修行し、ついに成仏した。

そのうちの第18願が「念仏したものは極楽浄土に往生させる」こと。

・薬師如来（薬師瑠璃光如来）

東方浄瑠璃世界（瑠璃光浄土）の教主で、菩薩の時に12の大願を発し、この世における衆生の疾病を治癒して寿命を延べ、災禍を消去し、衣食などを満足せしめ、かつ仏行を行じては無上菩提の妙果を証らしめんと誓い仏と成ったと説かれる。瑠璃光を以て衆生の病苦を救うとされている。

・釈迦如来、釈迦牟尼仏

ゴータマ・シッダールタを仏として敬う時の呼び方。

上座部仏教では、現世における唯一の仏とみなされている。

従って、修行者が到達できるのは阿羅漢までで、仏陀にはなれないと考えられた。